

大学教務実践研究会第9回大会 分科会2a

大学教育の国際化 を支える教務事務

～教務と国際が協働するために～

【事前配布用抜粋版】

2021年12月11日
教務部門と国際部門の架け橋プロジェクト
(プロジェクトリーダー)
東京都公立大学法人 宮林 常崇

大学教育の国際化に教務事務が果たすべき役割はますます高まっていますが、教務部門と国際部門の連携不足が課題となっている職場は少なくありません。そこで、大学教務実践研究会では「教務部門と国際部門の架け橋プロジェクト」を立ち上げ、お互いの連携を円滑にするために役立つツールの開発を行っています。

本分科会は、このプロジェクトで論点整理した「大学教育の国際化を支える教務事務に必要な知識・理解」について報告したのち、その知識・理解を深めるためのグループワークを行います。それぞれの職場で「教務事務の国際化」を進めるために何が必要かを考える機会になればと思います。



【分科会の構成】

- 1 プロジェクトの紹介
- 2 論点整理
国内学生編・国際学生編
- 3 休憩
- 4 グループワーク「4つの問い」
- 5 クロージング

1 プロジェクトの紹介①

【プロジェクトの背景・目的】

多くの大学では、海外大学との調整や留学生支援業務を専ら担う事務組織（以下、国際部門）を設けているが、大学教育・学生支援を専ら担う事務組織（以下、教務部門）との連携不足が大学の国際化の足かせになっているケースが散見される。

その原因の1つとして、教育制度や組織文化の理解がそれぞれの部門で異なることが挙げられる。例えば、単位認定について、国際部門は諸外国の個別の事例には詳しいが所属大学の単位認定については精通していない。反対に、教務部門は留学生の単位認定にあたり、諸外国の教育制度についてまで理解を深めようという発想はあまりない。

このプロジェクトでは、それぞれの部門の職員が一般的に理解できていないことを可視化し、お互いが理解を深めるために共通して獲得すべき実践的な知識や理解を整理する。この整理を踏まえ、各大学の教育国際化促進に役立つSDプログラムを検討・試行し、事務組織の改善や国際部門と教務部門の架け橋となる職員育成に貢献する。

1 プロジェクトの紹介②

【プロジェクトの目標】

◆第1段階／知識・理解の整理 2021.10～2022.1

国際部門と教務部門が協働するために必要な知識・理解を整理する。

⇒この結果を[大学教務実践研究会第9回大会分科会で報告](#)し、整理した事項をブラッシュアップする。

第1段階では国公立から11名の職員が参加

アドバイザー 塩川雅美氏（大阪市立大学高等教育研究院 特任教授）

第1段階終了時に一旦解散し、第2段階メンバーを改めて広く募集
（第1段階メンバーの再任も可能）

◆第2段階／SDプログラムの開発 2022.4～2022.12

第1段階の成果を踏まえ、事務組織の改善や国際部門と教務部門の架け橋となる職員育成に有用なSDプログラムを開発する。

⇒この結果を名古屋大学高等教育研究センター招聘セミナーで報告することや、大学教務実践研究会主催講習会での実施を目指す。

1 プロジェクトの紹介③

【キックオフ 教務と国際それぞれに関係しそうな業務で困っていること】

- ・ 在留確認ネタ
- ・ 国際交流をミッションとしている教員職との調整ネタ
- ・ 学生周知ネタ
- ・ お互いの事務文化の違い
- ・ 海外大学との連携ネタ
- ・ コラボ授業やオンライン留学
- ・ 教務ど真ん中ネタ

日本語授業の単位認定

海外語学研修の単位認定（どこまでやっていい？）

交換留学の単位認定

教職課程との両立

単位の振替基準

継続履修（留学前後）

学籍切り替えのタイミング

英文での成績証明書ネタ

【これまでのミーティング】

10.19（火） 11.15（月） 11.25（木） 全て20:00～21:30

⇒大学教育の国際化を支援する業務の初任者向けQ&Aを作る

2 論点整理

教務部門と国際部門の連携不足を解消することの第一歩は

- ◆ 学生視点で考えること
- ◆ お互いの状況を理解するための対話

この論点整理では、それぞれの職場での対話のきっかけとしてもらうために「最近の学生が困っていること」の例をご紹介します。

1) 国内学生編

《資料は当日参加者のみ》

2) 国際学生編

《資料は当日参加者のみ》

3 グループワーク（イントロ）

＜グループワークのイントロ＞

ある若手職員の素朴な疑問

『留学中に留学先大学と提携する語学学校に通い英会話の授業を受講しましたが、留学先大学ではこの語学学校の履修科目については成績証明を行っていません。帰国後に単位認定をすることは可能でしょうか』

ある先輩職員の頭の中

- 1) 自大学のプログラムとして開講した授業科目 なのか？
- 2) 自大学の授業科目とみなし単位認定をする のか？

＊大学設置基準第28条第2項＊

3 グループワーク①

事前に自分なりの考えを整理しておいてください。

もし、自大学の事例を確認できる方は、当日グループの中でご紹介いただけると幸いです。

< 1 留学生の復学 >

留学生が体調不良で4月から休学することになり母国へ帰国していました。この学生から「体調が回復したため、日本へ再度入国し翌年度4月1日から復学しようか考えている」との相談を受けました。

この場合、いつまでに復学の意思を決めてもらう必要がありますか。また、意思を確認する上で窓口担当者が心がけるべき点は何ですか。

《資料は当日参加者のみ》

3 グループワーク②

事前に自分なりの考えを整理しておいてください。

もし、自大学の事例を確認できる方は、当日グループの中でご紹介いただけると幸いです。

<2 証明書>

卒業生がアメリカの大学に進学するために英文証明書を発行してほしいと相談がありました。

その大学では、出願時に卒業生本人ではなく、本学が直接証明書を送付することが求められているとのことです。

あなたの大学ではどのように対応しますか。

《資料は当日参加者のみ》

3 グループワーク③

事前に自分なりの考えを整理しておいてください。

もし、自大学の事例を確認できる方は、当日グループの中でご紹介いただけると幸いです。

<3 授業時間と授業外学修時間>

正課の授業科目として「海外研修プログラム（夏季集中 2単位）」を新カリキュラム検討部会で議論することになりました。

部会長の先生から「授業だけでなく、現地の語学学校でのConversation Partners とのアクティビティやボランティア体験なども含めたい。

これらも授業の時間としてカウントしてよいか」との相談を受けました。

この部会で判断するために、事務局としてはどのような情報を整理しておく必要があるでしょうか。

* 1単位は45時間の学修が必要。

《資料は当日参加者のみ》

3 グループワーク④

事前に自分なりの考えを整理しておいてください。

もし、自大学の事例を確認できる方は、当日グループの中でご紹介いただけると幸いです。

< 4 単位認定（単位数） >

海外の大学で修得した単位を、本学の単位として認定する場合、認定する単位数の算出においては、どのようなことに留意すべきでしょうか。

《資料は当日参加者のみ》

4 クロージング

◆「働きがい」とは「働きやすさ」 + 「仕事のやりがい」が揃っていること

◆働きやすさ（可視化しやすい）

就労条件や報酬条件など

働きやすさ

快適な環境

◆仕事のやりがい（可視化が難しい）

やる気やモチベーションなど

困難

仕事のやりがい

大学事務室でこれを実現するためには、どうすればよいか？

「働きやすさ」

「仕事のやりがい」

で

個人が関与できることは？

《参考文献》坪谷邦生『人材マネジメント入門』（2020, デイスカバー・トゥエンティワン）

【この後の予定】

15:30～16:00 個別質問＜希望者のみ＞

- ・分科会担当者（宮林ほか）と参加者で、分科会の内容に関する質疑応答の場として開放します。

16:10～17:00 交流会＜希望者のみ＞

- ・この時間は、参加者間で「大学教育の国際化を支える教務事務」をテーマとして意見交換をする場として開放します。
- ・分科会担当者1名以上は在室しますが、あくまでシステム管理を行うのみです。
- ・在室者が0名になった時点で、クローズします。

【本分科会に関するお問い合わせ先】

東京都公立大学法人 宮林

miyabayashi-tsunetaka@jmj.tmu.ac.jp